

〈2015年度長野大学研究助成金による研究報告〉

(準備研究)

有機農業運動の多系的発展モデル構築に向けた社会学的研究： 中山間地を事例にして

相川陽一*

Youichi AIKAWA

研究実績の概要

本助成研究の目的は、戦後日本における有機農業運動の展開過程を追尾することにより、1) 1970年代初頭の日本有機農業研究会の成立を契機とみる戦後日本の有機農業運動史の相対化をはかるとともに、2) 日本における有機農業運動の形成と展開に関する多系的な発展モデルの構築を試みることにある。本研究により、1960年代以降の基本法農政のもとで大きく揺らいだ「農と食」に関わる諸主体と地域社会の存立基盤の持続可能性を担保する地域農業のあり方を地域条件に応じてモデル化し、農を基盤とした持続可能な地域社会形成に向けた指針提示を示すことができるのではないかと考える。以上が本助成研究における申請者の主たる研究テーマである。

2015年度には、前項に記した研究目的 1) 2) に関し、大都市圏から遠く離れた中山間地における有機農業運動の発展過程を明らかにすることを目指した。2014年度に調査対象とした首都近郊農村（千葉県北東部）とは地域特性が大きく異なる中山間地を研究対象に設定し、両地域の有機農業運動の展開過程の比較研究に展開していくための基礎データの収集を行った。調査地として、高度成長期以来の過疎化の進行下で人口減少と高齢化に直面している中国山地の中でも、島根県に着目し、同県内でも早くから有機農業運動が展開されてきた地域のひとつである島根県西部の浜田市弥栄町（旧那賀郡弥栄村、以下弥栄と呼称）を調査対象地とした。弥栄は、1960年か

ら1965年までの短期間に人口の約3分の1が減少する深刻な過疎化に直面しながらも、1970年代初頭に、山陽方面から若手移住者を迎え、全国的にみても早くから有機農業運動が展開されてきた地域である。移住者による有機農業運動の展開がみられることに加え、落葉や刈草等の近接資源を活用した在来農法も高齢者によって営まれており、移住者による有機農業運動と地元高齢者による自生的な有機農業が展開されている。両者の実態を明らかにすることで、平場農村における有機農業運動との種差性を意識した有機農業の地域展開モデルを構築できると考え、2回の現地調査を実施した。

現地調査では、同地域で、全国的にみても早い時期から山村移住者による有機農業運動が展開されてきたことを追尾するとともに、ドキュメント分析と聞き取り調査から、同地域における移住者と在村者における有機農業の様態を実証的に明らかにした。具体的には、2015年8月と翌3月に、2回の現地調査を実施し、1970年代初期にコミュニティとして設立された弥栄之郷共同体（現有限会社やさか共同農場）のスタッフとして地域資源の商品化に携わってきた関係者から、同共同体が「Iターン」という言葉が使用される以前（「帰農」と呼ばれていた時代）から山村移住者の受け入れと定住を促す役割を担ってきたことを、聞き取り調査に基づいて跡づけることができた。当地の有機農業運動の牽引役となってきた山村移住者は、入植世代の子供世代に経営継承を行っており（血縁的継承と非血縁的継承の二方式）、孫世代

*環境ツーリズム学部准教授

も誕生していることなどを確認することができた。

そして、在村高齢者層による在来農法としての有機農業の取り組みを明らかにするため、地域内でも最も高齢化が進行した集落のひとつで、自給的利用も含めた田畑や山林の活用状況を明らかにするための集落悉皆調査（集落全戸調査）を実施した。高齢集落へのインセンティブな聞き取り調査を実施できたことにより、近年、農林業センサスをはじめとした既存の統計調査が調査対象を一定規模以上の経営面積に絞り込んできたことで不可視化されてしまった中山間地の副業的・自給的な農林業の様態を集落レベルで捕捉することができた。

これらの調査成果を、日本村落研究学会の2015年度大会テーマセッションにて報告し、成果論文を作成中である。今後、日本列島上の約6割を占める中山間地域における地域間の多様性を意識して、戦後日本における有機農業運動の多系的発展のあり方を、有機農業運動と在来農法の営みとの関連も含めて把握していきたい。

研究発表

学会シンポジウム報告

1. 相川陽一「現代山村における地域資源利用と定住促進—近接資源を活かした暮らしの継承に向けて—」、日本村落研究学会第63回（2015年度）大会、（2015年11月8日開催、岐阜県郡上市和良町）、テーマセッション「現代社会は『山』との関係をどう取り戻すことができるのか」における学術研究報告

雑誌論文

1. 相川陽一「現代山村における地域資源の自給的利用と定住促進の可能性」、年報村落社会研究、2016年 force coming 51巻